

中国の招諫思想からみる日本の前期難波宮および平城宮の設計

Phạm Lê Huy (ベトナム国家大学ハノイ校・人文社会科学大学)

はじめに

日中の都城比較研究は、従来「条坊制」や「三朝五門制」を中心に議論されてきた。また日本古代の都城制の源流を中国に求める際に、(1)『周礼』考工記などの古典、(2)魏晉南北朝の都城、(3)長安や洛陽などの隋唐代の都城が取り上げられてきたが、日本の都城制が遣唐使の時代に整備されたため、唐からの影響が最も強調されており、また過大に評価されることもある。

その代表的な事例は前期難波宮に関する議論である。1970年代に前期難波宮における発掘調査が進展するとともに岸俊男氏は「正殿・東西長殿」の遺構に着目し、その模範を魏晉南北朝の「正殿・東西堂」型⁽¹⁾に求めながらも、同じ前期難波宮の中枢部に設置された鐘と匱の設計、いわゆる「鐘匱の制」に関しては「唐の登聞鼓・肺石」から継承したと主張した(岸 1977)。「東西長殿」に関する岸氏の魏晉南北朝説はその後疑問視され、批判された。たとえば、吉田欽氏は「(中国)の東西二堂の機能が皇帝の居住・朝見・聴政といったものとすれば、東西二堂の構造は(前期難波宮で発見された)長殿のように梁間がたった二間で桁行だけ長い形式とは考えられず」、前期難波宮の東西長殿は構造的に「魏晉南北朝から影響をうけたと考えられない」との見解を示した(吉田 2002)。吉田氏の批判を踏まえた上で、中尾芳治氏は前期難波宮の「後殿」とされた遺構の北にもう一つの殿堂の存在を仮定し、その空間設計を唐の長安に見られるような南北軸の「三朝制」に想定した(中尾 2014)。

以上の議論より日本の都城制における中国の南北朝の影響は岸俊男氏によって問題提起されたものの、未だに疑問視されているという状況がよく窺える。そもそも村本健一氏が指摘したように、日本古代の都城制を考える際に中国の古典か南北朝か隋唐かという三者択一の論理に束縛される必要性がないと思われる。その観点に立った筆者は、本稿で岸俊

男氏の正殿・東西長殿に関する南北朝説をヒントにしながら、「鐘匱の制」に関する同氏の唐代説を批判し、それも南朝から影響を受けた制度だと明らかにしたい。前期難波宮の「鐘匱の制」は、民が訴えるための器具として設置されたが、平城宮にも同じ機能の「二柱の制」が設けられたことにも着目し、両方とも中国の招諫思想にその源流を探求し、日本古代の都城制における中国文化の多元的な影響を論じたい。

1. 飛鳥板蓋宮・前期難波宮における「鐘匱の制」および平城宮の「二柱の制」

いわゆる「鐘匱の制」は『日本書紀』(『書紀』)の大化元(645)年8月庚子(5日)条⁽²⁾や大化2(646)年2月戊申(15日)条⁽³⁾の孝徳天皇の詔書に記述されている。それによると、孝徳天皇は大化元年から2年にかけて宮都の「朝」という空間に鐘・匱を設置し、下記の発想で訴訟制度に活用しようとした。もし「訴」や「諫」に憂える人がいれば、まず「伴造」や「尊長」に報告してその審理をうける。「伴造」や「尊長」による審理に不満を持つならば、訴人は「牒」や「表」といった訴状を「朝」の「匱」に投書して、覆審を求めることが可能である⁽⁴⁾。訴状は翌日の明け方に「收牒者」や「收表人」といった匱の管理者によって収集され、内裏で天皇に奏上される。天皇は訴状に日付の題名を注記した上で群卿に覆審を指示する。群卿による覆審に懈怠や歪曲があったら、訴人は、今度は「朝」にある「鐘」を撞き、天皇に直接訴えることが許されるという。

上記の「鐘匱の制」は大化改新の一連の出来事として『書紀』に記載されているため、史料の信憑性が問われている。ところが、次の根拠をもって『書紀』の記載はたとえ潤色があったとしても架空から偽造されたものではなく、7世紀半ばに実在した制度を反映したものと考えられる。

まず、仮に大化元年の詔（前詔）及び大化2年の詔（後詔）が『書紀』の成立段階で一斉に偽造された記事だとしたら、両者の間で語句が統一されたはずである。ところが、「牒」と「表」、「憂訴」と「憂諫」、「收牒者」と「收表人」に見られるように、語句が明らかに異なっている。

次に後詔は、前詔をそのまま繰り返したのではなく、実状にあわせて規定を改正した部分も見受けられる。「昔詔曰、『諫者題名』、而不随詔、今者、自非求利、而将助国、不言題不、諫朕廢忘」とあるように、前詔では訴状に訴人の名前を記載することが義務化されたのだが、後詔になると、諫言を促すために、匿名による訴状も許されるようになった。

さらに、後詔は制度を規定するに止まらず、実施状況についても言及した。具体的に「然遷都未久、還似于賓、由是、不得不使、而強役之」とあるように、前期難波宮に遷都してから、年月がそれほど経っていないため、どうしても土木工事に人を動員せざるをえない状況であった。そこで「其表称、縁奉国政、到於京民、官留使於雑役」とあるように、国政に奉仕する人（地方から納税に来京した人夫のことだろう）は都に来ると、中央の役人に都に留められ、雑役を強制させられたという表は匱に投じられた。その表を受け取った孝徳天皇は、各所の雑役を廃止することにしたという。文書で訴えるという制度の存在は、別の記事からも再確認できる。『書紀』によると、大化3（647）年工人倭漢直荒田井比羅夫が計画を間違えて溝の掘削工事を行い、百姓に負担をかけた事態が発生した。「疏」という文書による訴えを受けた孝徳天皇は、自ら責任をとり、その雑役を廃止したという⁽⁵⁾。

以上の分析から『書紀』の記述は、たとえ潤色があったとしても孝徳天皇の宮都における「鐘匱の制」の実在を示していると考えられる。ここでいう宮都とは、飛鳥板蓋宮及び前期難波宮両方である。なぜかという点、「鐘匱の制」が初めて言及された大化元年8月5日の時点での宮都はまだ飛鳥板蓋宮であった。後者の詔書は、孝徳天皇が子代離宮（後に小郡宮に再建）に御幸中⁽⁶⁾の大化2年2月15日に下されたが、その2ヶ月前、つまり大化元年

12月9日に孝徳天皇はすでに難波に遷都することを宣言したのである⁽⁷⁾。前期難波宮は白雉2（651）年12月⁽⁸⁾に孝徳天皇が大都から遷ったものの、鐘匱の設置は設計段階ですでに計画されていたと考えられる⁽⁹⁾。

鐘匱の設置場所は、大化元年の詔書に「設鐘匱於朝」や「懸鐘置匱於朝」とあるように、「朝」の空間である。大化2年の詔書に「懸鐘於門（闕）」との文言があるから、鐘は「朝」ではなく、「門（闕）」に設けられたのではないかという疑問もあるが、「朕聞、明哲之御民者、懸鐘於門（闕）」との文脈から考えると、当文言は実際の設置場所を示すのではなく、あくまでも古典の政治理念として引用されたものである。鐘・匱の設置場所は、このように天皇が出御し、政務を掌る「朝」という儀式的な空間だと考えられる。

なお、両道の詔書から「鐘匱の制」は、下級裁判に不満をもった訴人が天皇を頂点とした朝廷に上告するための器具として設置されたことがわかる。訴訟手順を整理すると、地方の伴造や尊長による第一審から、中央での群卿による第二審を経て天皇自身による第三審という三審制であるが、匱と鐘はそれぞれ第二審・第三審の器具として位置づけられたものである。

飛鳥板蓋宮・前期難波宮と同様、平城宮にも訴訟制度を支える器具、いわゆる「二柱の制」が設置されたことは注目すべきである。すなわち、『続日本紀』によると、天平神護2（766）年5月4日、称徳天皇は吉備真備の奏上を受けて平城宮の中壬生門の西に「二柱」を立てることにした。その一本に「凡そ官司に抑屈された人は、ここに来て訴えるよう」、残り一本に「百姓に冤枉がある人は、この下で訴えを申せ」との文章が書かれた。訴状を受理する責任は、弾正台にあったという⁽¹⁰⁾。

平城宮の中壬生門の位置に関しては、従来朱雀門の東にある南面東門の壬生門とする見方もあった（新日本古典文学大系本『続日本紀』・補注）が、現在唐の応天門に相当する門、すなわち第二次朝堂院・朝集殿院南門とする直木孝次郎氏の説のほうが有力になっている（金子 2007）。上記の仮説が正

しければ、平城宮の二柱も飛鳥板蓋宮・前期難波宮と同様、「朝」の空間に設置されたものである。

なお、平城宮の「二柱の制」は、柱の下に立って訴えることを原則としたが、その一方、弾正台に訴状を受け取らせるといふ点から見ると、文書による訴えを求められることもわかる。

以上、飛鳥板蓋宮・前期難波宮ならびに平城宮では、訴訟制度を支える器具が朝廷によって設置された。前期難波宮の「鐘匱の制」に関して前述したように、岸俊男氏はその源流を「唐の登聞鼓・肺石」に求めるべきだと主張した。一方、平城宮の「二柱の制」に関して、金子裕之氏は唐の洛陽における応天門の登聞鼓・肺石の制を受容したとの見解を示した（金子 2007）。

要するに、両者とも登聞鼓・肺石の制を模倣した制度として位置づけられてきた。ところが、飛鳥板蓋宮・前期難波宮の「鐘匱の制」、平城宮の「二柱の制」、またそのモデルだとされた唐の「登聞鼓・肺石の制」は明らかに器具が異なっている。その相違の原因を解明するために、本稿では三者の共通的な源流である中国の招諫思想を紹介し、中国の歴代王朝による招諫思想の具現化を分析したい。

2. 中国の招諫思想及び歴代王朝による具現化

（1）招諫思想の起源

中国の古典思想に、理想的な政治を実現するために為政者は独断的になつてはならず、常に民からの批判や諫言に耳を傾けなければならないという理念が存在した。先秦時代の思想家鬻子・管子・尸子らは、この理念はすでに黄帝・堯・舜・禹・湯の代に施行されたと主張した。周代の鬻子は、禹は天下を治めるために「五声をもって聴く。門に鐘・鼓・鐸・磬を懸け、而して鞀を置き、もつて四海の士を待つ」と述べ、また「筍簴」といった鐘などの掛け台に「道を以つて寡人（王の自称：ファム）に教えんとする者、鼓を撃て。義を以つて寡人に教えんとする者、鐘を撃て。事を以つて寡人に教えんとする者、鐸を振れ。憂を以つて寡人に告げんとする者、磬を撃て。訟獄を以つて寡人に語らんとする者、鞀揮（ふる）え」との銘文が刻まれたとした⁽¹¹⁾。管

子も、政治の「過誤」に備えるために、舜と禹はそれぞれ旌と鼓を立て、人の意見を訊ねると述べた⁽¹²⁾。齊桓公と問答する際に管子は「禹立諫鼓於朝而備訊唉」とあるように、禹は「朝」の空間に「諫める鼓」を立て、訊ねに備えると説明した⁽¹³⁾。一方、戦国時代の尸子によると、堯は人の批判を聞くために「誹謗之木」を立てたという⁽¹⁴⁾。

戦国時代に成立し、周王朝の理想的な制度について書き残したとされる『周礼』によると、周は「大寝門」の外に「路鼓」を建てたという。「路鼓」の他に、「嘉石」（「文石」：模様がある石）及び「肺石」（肺の形をした「赤石」）は「外朝門」に設置された。『周礼』では、意見がある人は「肺石」のもとで三日間連続立つと、「士」（担当役人）に話を聞いて、また上に告げてもらうことができるという⁽¹⁵⁾。

要するに、鬻子・管子・尸子などの先秦時代の思想家たちや『周礼』の撰者は、禹や周の天子をはじめ、「聖帝明王」という理想的為政者は、（1）旌（「幡」とも）⁽¹⁶⁾、（2）鼓・鐘をはじめとした「五声」、（3）「誹謗の木」（「謗木」とも）、（4）「肺石」などの器具を設置することにより、「訴え」や「諫め」など幅広く民の意見・建言を聞き、それをもとに自分の政治を是正すると主張した。一方、民は旌を振ったり、鼓や鐘を撃ったりすることにより、為政者の目や耳に訴え、直接意見を届けることができる。ただし、鐘・鼓の設置場所に関して、鬻子・『周礼』と管子との間で見解が微妙に相違している。鬻子は、鐘・鼓をはじめとする「五声」は「門」に懸けられたとした。『周礼』でも、鼓は「大寝之門外」、つまり「門」に設置されたとされた。一方、管子は、禹の鼓は「門」ではなく、「朝」の空間に設けられたとした。これに関連して、後述するように、唐代に都城を設計する際に「朝（堂）」を「門」（闕）の外に置いたことは、この相違点を解消するためであったと考えられる。

鬻子・管子・尸子や『周礼』の思想は、後世に多くの知識人に受け継がれ、一種の政治理念とされた。この思想は、歴代皇帝の詔書や名臣の章疏・奏表のみならず、『文選』や『芸文類聚』などの類書にも

しばしば言及された。梁代になると、『文心雕龍』を撰した劉勰（465～520）は、「大禹勒筭簏、而招諫」とあるように、鐘などを懸ける目的は「招諫」するためだとした⁽¹⁷⁾。南宋代に入って、鬻子・管子・尸子の意見を「招諫」の項目の冒頭に揚げた『玉海』の撰者・王應麟（1223～1296）は、これを歴代王朝の「招諫」という政治理念の起源として位置づけた。

招諫思想は、これまで特に中国の法制史研究で注目されてきた⁽¹⁸⁾。しかし、本稿では思想史や法制史ではなく、都城研究という視点でこの理念がどのように歴代王朝の都城制に具現化されたのかを検討してみたい。具体的には、（１）鐘、（２）鼓、（３）謗木、（４）肺石、（５）甌（「匱」・「函」とも）という五つの器具に絞って、それらが都城のどこに設置され、どのように活用・併用されたのかを検討する。また本稿の研究対象が日本古代の都城制であるため、漢代から唐代までの中国の都城制だけを考察することにする。

（２）中国の都城制における正殿前の鐘・鼓の設計及び招諫思想の具現化

漢・魏時代

漢王朝は、洛陽と長安で「中庭」、つまり正殿の殿庭に「鐘虞」（鐘の掛け台）を設置した⁽¹⁹⁾。これが南北を軸に左右（東西）対称の「鐘虞」であったことは、『後漢書』周举伝に「朝廷在西鐘下」の表現から窺うことができる⁽²⁰⁾。洛陽北宮の最も中心の建物である徳陽殿でも同じ設計が導入された⁽²¹⁾。

ところが、これらの鐘は、朝廷の儀礼に用いられた楽器であったことに注目すべきである。たとえば、「兩都賦」から窺えるように、天子が罷朝・入宮し、百官が退朝する際に「蕤賓」鐘が撃たれ、また「左の五鐘」が皆それに応じたとある⁽²²⁾。

鼓に関しては、漢～三国時代には招諫用の鼓はまだ設けられていないようである。『後漢書』によると、楊震（54-124）は漢の皇帝に奏上する際に、堯舜の世に諫鼓・謗木があったという理念に触れたが、その建言は最終的に認められなかった⁽²³⁾。

謗木に関して、先秦の理念をもとに漢代の知識人

はより具体的な解釈を加えた。たとえば、服虔（生没年不詳）は、堯の謗木は「交午柱頭」とであると説明した。「交午」の意味について、鄭玄（127～200）は、「午」字形のような横木一本と縦木一本の組み合わせ、いわゆる「木貫表柱四出」の形状だと解説した。一方、応劭（153～196）や韋昭（204～273）は、謗木は「板」のようなもので、そこに政治の欠失を書き上げるものだと言った。このように漢～三国時代の知識人は、謗木の形状について若干異なる見解を示したが、謗木が都城計画の一部ではなく、あくまでも通行者が多い「橋梁」に立てられるという点で意見が一致していた⁽²⁴⁾。

要するに、漢魏時代の都城制に、正殿の前（殿庭）に鐘を左右対称に配置するという設計がすでに導入されていたのである⁽²⁵⁾。ただ鐘は、前述したように招諫のためではなく、あくまで儀礼の楽器として用いられたものである⁽²⁶⁾。なお、この時代に「諫鼓」や「謗木」に関する理念はより具体的に解説されたにもかかわらず、都城制の一部としてまだ具現化されるには至っていない。

西晋代（266～317）

西晋王朝は漢魏の左右（東西）対称の「鐘虞」の設計をそのまま継承した。東晋末の戴延之（生没年不詳）撰『西征記』に「洛陽太極殿前、左右各三銅鐘相對」とあるように、洛陽の正殿・太極殿の前に左右各々三つの銅鐘が設置されたという⁽²⁷⁾（図1）。この設計は、元康3（293）年に「殿前の六鐘」から「涙」が出たという『晋書』の記載からも再確認できる⁽²⁸⁾。「六鐘」が「六律」に対応していることは注目すべきである。さらに、後述のように、南朝までは洛陽の「鐘虞」の規制が漢魏の制を受け継いだという認識があったため、西晋の「鐘虞」も楽器として機能したことが推測できる。

鼓に関しては、西晋は民の意見を聞くために「登聞鼓」の制を開始した。「登聞鼓」という名称はこの時代に登場したと考えられている。『晋書』によると、泰始5（269）年、麴路は「登聞鼓」を撃ち、訴えたが、その言葉に「祆謗」の話があったため、有司に処刑するよう奏上されたという⁽²⁹⁾。なお八

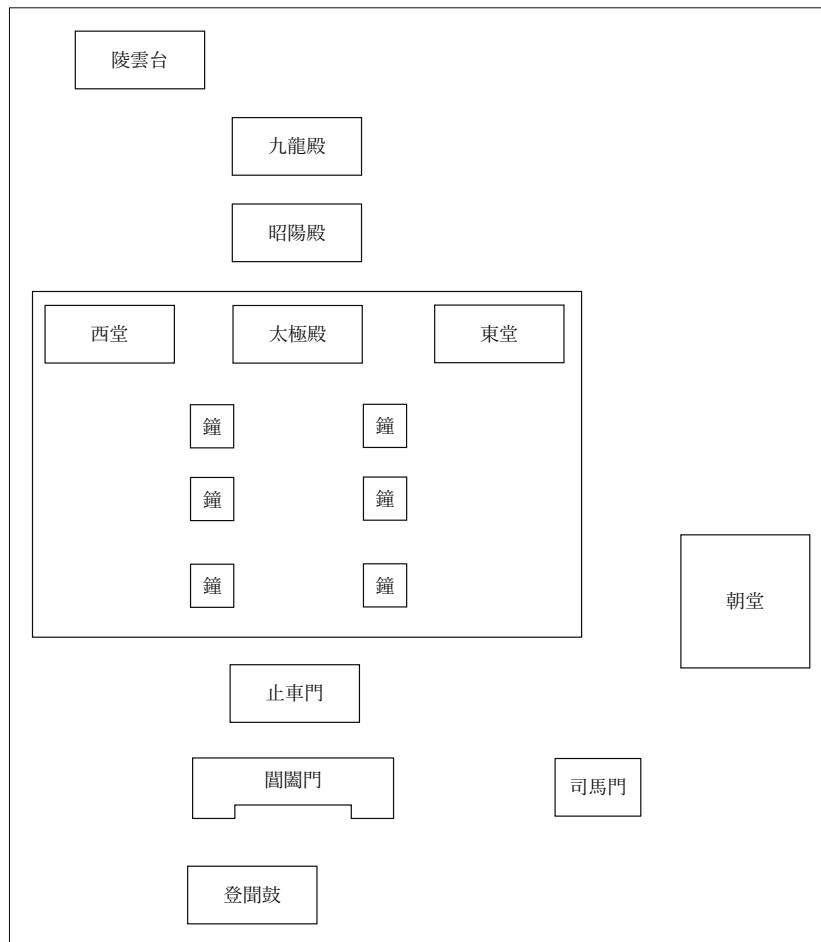


図1 西晋代の洛陽の鐘と「登聞鼓」

王の乱（291～306）の最中、太保主簿劉繇らが「黄幡」を執り、「登聞鼓」を撃ったという出来事も『晋書』に見られる⁽³⁰⁾。このように、西晋代に「登聞鼓」が設けられたことは確かであるが、その設置場所は不詳である。古典思想では「朝」か「門」に設けるのが理念とされた。『晋書』を見渡すと、たとえば周札伝に「詣闕訟」（「闕に詣で訴える」）とあるように、訴える器具としての鼓が「闕」（閭闔門）に置かれた可能性がある⁽³¹⁾。

謗木に関しては、崔豹撰『古今注』（3世紀成立）によると、「謗木」は形状が「桔槔」（はねつるべ）に近く、「西京」（長安）に「交午木」として設けられたという⁽³²⁾。ところが、謗木が長安のどこに設置されたのか、具体的な記述がない。

以上の分析をまとめると、西晋代に招諫器具として用いられたのは、登聞鼓及び謗木である。その設置場所については、登聞鼓がおそらく「闕」（閭闔門）に設けられたと推測できる。当時、漢魏と同様、

太極殿の殿庭に左右（東西）対称の鐘が設けられたが、依然として招諫思想との関係が見えず、あくまでも礼の楽器として用いられたと考えられる。

東晋代（317～420）

八王の乱や永嘉の乱を経て、西晋の貴族は江南に避難し、東晋王朝（317～420）を創立し、南京辺りに首都建康を建設した。

戦乱の影響で、東晋は洛陽や長安の「鐘虞」を建康に移転することができなかった。洛陽の「鐘虞」は、咸康2（335）年、後趙（319～350）の皇帝石季龍によって他の王権のシンボルである「九龍」、「翁仲」、「銅駝」、「飛廉」とともに鄴に運ばれた。「鐘虞」はこのように、諸勢力の権力の正当化に利用されていた⁽³³⁾。536年、洛陽を一時奪還した東晋の大將桓

温は洛陽の「鐘虞」を建康に移そうとしたが、結局実現できなかった⁽³⁴⁾。

鼓と謗木に関しては、太興元（318）年、建康で初めて「諫鼓」と「誹木」が併設された⁽³⁵⁾。設置場所を具体的に記す史料はないが、『晋書』の王湛伝に「詣闕訟之」（闕に詣で、これを訴える）⁽³⁶⁾という言葉が見られるように、諫鼓と謗木は「闕」に設けられたと考えられる。ところで、周知のように建康で本格的な闕が建設されたのは梁の天監7（508）年に入ってからなので⁽³⁷⁾、『晋書』の「闕」の記載は、建康の宮城の正南門・大司馬門を誇示するものだと考えるべきであろう。

要するに、東晋代に用いられた招諫器具は、諫鼓及び謗木である。両方とも大司馬門の外に設置された可能性が高い（図2）。戦乱のため、洛陽や長安の本来の「鐘虞」が江南に移転されなかったため、建康では正殿前の左右対称の「鐘虞」という漢魏～西晋以来の伝統は、一時断絶したことが注目される。

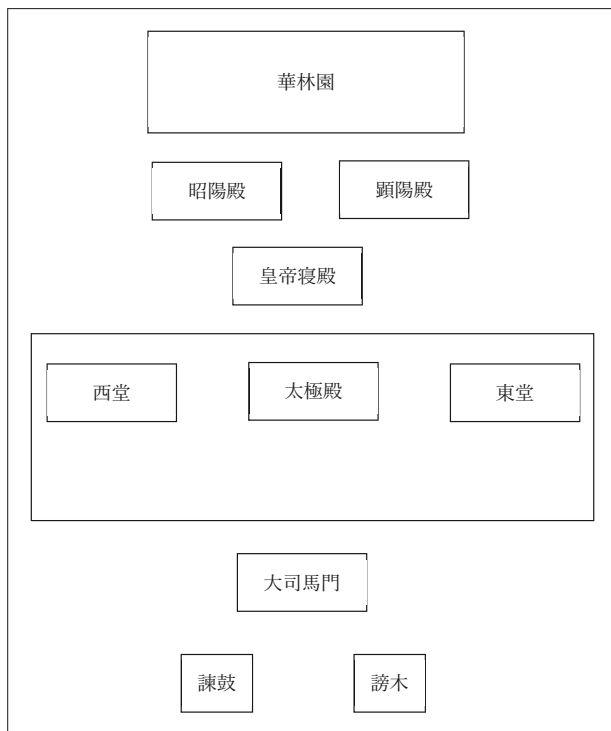


図2 東晋代の建康の諫鼓と謗木

南北朝時代（420～589）

北朝で用いられた招諫器具は登聞鼓及び謗木である。北魏（386～534）では、魏世祖（太武帝）は「闕左」（閭闔門の闕の左）に「登聞鼓」を懸けることにした⁽³⁸⁾（図3）。設置場所が「闕左」であったことは、『魏書』の「刑罰志」の「闕左懸登聞鼓、人有窮冤則撾鼓」との文言からも再確認できる⁽³⁹⁾。同じ史料によると、「冤人」が「登聞鼓」を撃つと、公車官はそれを伺い、皇帝に奏上するという制度である。『水経注』にその撰者・酈道元（466/472～527）は、登聞鼓が「闕前水南道右」に懸けられたとさらに具体的に記述した⁽⁴⁰⁾。門に鼓を懸けるということは西魏（535～557）に継承された。大統5（539）年、西魏政権は、長安の陽武門の外に鼓を懸け、また政治の得失に関する意見を求めるために、「紙筆」も一緒に用意した⁽⁴¹⁾。正南門ではなく、西側の門である陽武門に鼓をかけたのは、西魏の制度の大きな特徴である。

南朝では、少なくとも梁代に入ると、諫

鼓と謗木が招諫器具として利用され始めた。すでに劉宋の元嘉2（425）年に范泰は謗木と諫鼓を闕に立てるように朝廷に建言した⁽⁴²⁾のだが、それを実施した形跡はない。南齊代に、「冤」を抱える人が公車尚書に申し出、訴えるという制度の存在は崔慧景伝から窺える⁽⁴³⁾。ただし、公車の官衙に何らかの器具を設置することを示す史料は見当たらない。梁の天監元（502）年になると、梁高祖は「諫鼓」（「登聞鼓」とも）を設置することにした。それがわかるのは、『文選』所収の「天監三年策秀才文三首」に「朕立諫鼓、設謗木、於茲三年矣」、つまり「朕が諫鼓を立て、謗木を設けてから、すでに三年経った」とあるからである⁽⁴⁴⁾。また『梁書』の臧厥伝や吉玢伝にも「登聞鼓」を撃ち、訴えた事例が書かれている⁽⁴⁵⁾。史料は後述するが、同じ天監元年、「公車府」といった官衙に「肺石」や「謗木」という器具も設置された。ところで、梁の「公車府」はどこにあったのだろう。

南齊・梁・陳代を通じて、公車府は、天下の「章奏」の受入を掌る公車尚書・公車令の役所である。その場所に関して、渡辺信一郎氏の建康復原図

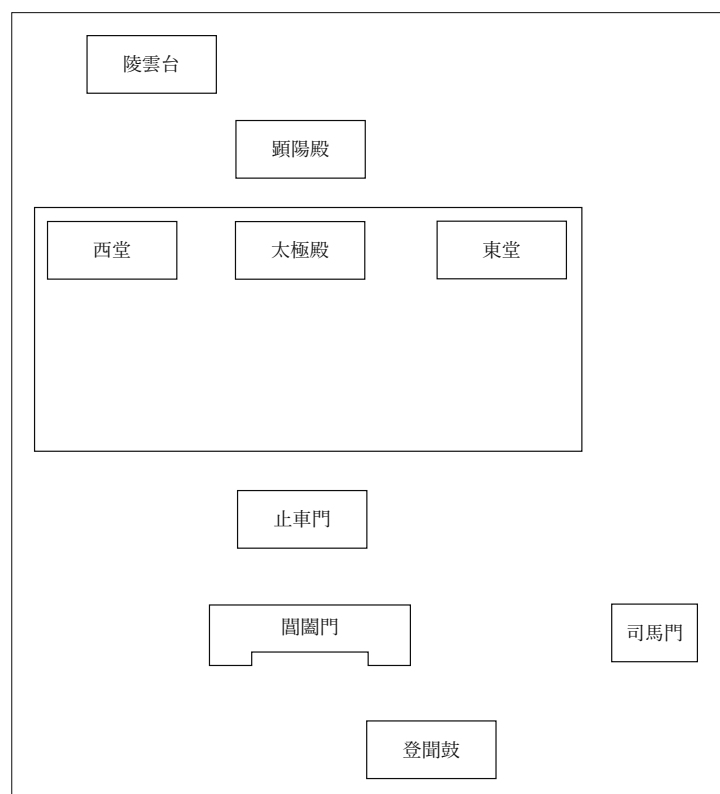


図3 北魏の洛陽における登聞鼓

では、建康の宮城・台城の正南門の内側（508年以前は大司馬門、508年以降は南掖門・端門）に復原された（渡辺 2009）が、侯景の乱（548）に関する一連の記述を検討すると、公車府が台城の外にあった可能性が高い。というのは、侯景は公車府を占拠し、それを拠点に「登城楼」などの戦具を用いて台城を攻めたからである。さらに、『資治通鑑』では元代の胡三省（1230～1302）も「梁制、公車令、属衛尉、其署舍在台城門外」とあるように、公車府が台城の門の外にあったとの注釈を施した⁽⁴⁶⁾。このようにみると、公車府の所在を台城の正南門の周辺に復原した渡辺氏の見解に一応賛成できるが、正確な場所は門の内側ではなく、門の外側であったと考えるべきであろう（図4）。

要するに、天監元（502）年、梁は諫鼓以外に台城の正南門・大司馬門の外にある公車府に肺石と謗木を設置したのである。正南門は508年に大司馬門から南掖門（端門）に変更されたが、大司馬門にも南掖門にも闕が建設されたため、公車府が南掖門に移転されたかどうか、不明である。梁の諫鼓の設置場所を示す史料はない。陳代になると、諫鼓は公車府に、肺石は「象魏」（闕の別称）に設けられるようになった⁽⁴⁷⁾。

本稿で問題にした前期難波宮の「鐘匱の制」に関しては、梁は諫鼓・謗木・肺石とともに「函」の制や「鐘」の制も併用したことに注目すべきである。前者に関しては天監元（502）年、梁武帝は公車府の謗木と肺石の傍らに函も置くように詔を出した。その詔書に「役人（「肉食」）が言わないことを山野（「山阿」）の人が朝廷に建言（「横議」）したいならば、謗木の函に投書せよ。一方で大政が小民の権利を侵し、豪族や権門が賤民を陵辱し、四民が窮地に追い込まれ、またこの声が皇帝（「九重」）にどうしても届いていないならば、肺石の函に投書せよ」とあるように、謗木と肺石、それに伴う函の機能が区別された⁽⁴⁸⁾。このようにみると、訴訟手順として謗木・肺石・函は、同じ審

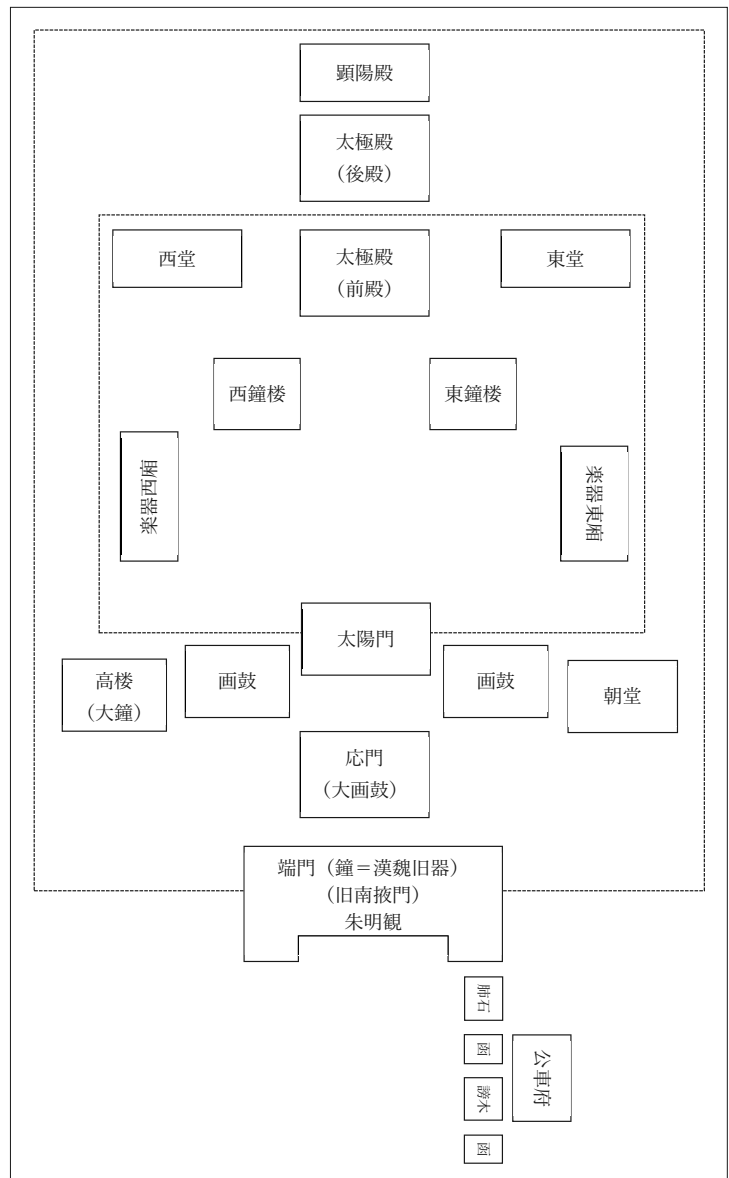


図4 南朝の建康における鐘・鼓の設計
（渡辺 [2009] の図面をもとに加筆）

理のレベル（公車府による受入）に位置づけられたが、訴訟の内容、訴訟の形態（謗木や肺石に立つか函に文書を入れるか）によって使い分けされた。

その一方、正殿前の「鐘」の設計は南朝に入ってから大きく変化した。劉宋王朝（420～479）の創立直後の元熙元（419）年、武帝劉裕は「鐘虞」を設置し、権力の正当性を主張しようとした。その背景には、416～419年にかけて北伐を行った劉裕が、洛陽や長安の「旧器」である「鐘虞」を手にすることができたということがあった。梁武帝撰『鐘律緯』によると、長安と洛陽を攻めた際に、劉裕は長安と

洛陽からあわせて「六鐘」を入手したが、最終的に建康に運ばれたのは三つしかなかった⁽⁴⁹⁾。劉宋代の山謙之（?～454）撰『山謙之記』の逸文によると、「殿前三鐘」云々とあるように、当初三つとも太極殿の前に設置されたのだが、梁代に入ると、そのうちの一つは端門に移された。唐代成立の『六朝宮苑記』では、「太極殿の前の東西に二つの大鐘があり、宋武帝が洛陽を平定した際に入手した漢魏の旧器のものである」とある⁽⁵⁰⁾。また『鐘律緯』をみると、「宋武帝は中原を平定し、將軍陳傾に三鐘を取らせ、小大中各々一つ、則ち今の太極殿前の二鐘と端門の外の一鐘である」という⁽⁵¹⁾。この一連の史料をみると、洛陽や長安で「六律」に応じて太極殿の前に「六鐘」が置かれたという西晋の規制・伝統は、劉宋代を経て南朝の梁代になると、建康の正殿・太極殿の前の二鐘という設計に変化した。

その状況のなかで南齊や梁代に入ると、招諫器具としての鐘の役割が強調されるようになった。それはまず『文選』の「永明九年策秀才文五首」から窺うことができる。南齊の王融（467～493）によって書かれた当詔書に「或揚旌求士、或設虞待賢」とあるように、「或いは旌を揚げて士を求め、或いは虞を設け、賢を待つ」との文言がある。唐代に『文選注』を撰した李善が管子や鬻子の発言をあげてこの文章を解説した⁽⁵²⁾ように、「或揚旌求士、或設虞待賢」は招諫思想を意識した文言である。特に注目すべきであるのは、「設虞」という言葉が用いられたことである。これまで見たように、「設（鐘）虞」は、正殿前の王権のシンボルとしての「鐘虞」を設けることを指す言葉だったので、「永明九年策秀才文五首」の文章から正殿前の鐘を招諫器具と見なす意識が窺えるだろう。

鐘を招諫器具として見なす意識は梁武帝の大同2（536）年3月庚申日の詔書にも見られる。「致使失理負謗、無由聞達、侮文弄法、因事生姦、肺石空陳、懸鐘徒設」とあるように、腐敗した政治は「肺石も空しく陳じ、懸鐘も徒に設け」る状況を生んだとの指摘があった⁽⁵³⁾。つまり、「懸鐘」は「肺石」と並んで、「招諫」の器具として取り上げられているのである。この「懸鐘」は唐代成立の筆記『西陽

雜俎』の「懸鐘」に当たるものと思われる⁽⁵⁴⁾。当書によると、大同8（542）年、梁の建康に訪れた北魏の使者は端門、応門、太陽門を通過し、「懸鐘内」という空間に入ったという。太陽門は太極殿の門なので太陽門の内側にある「懸鐘」は太極殿の殿庭における左右対称の鐘を指したものだと考えられる⁽⁵⁵⁾。

要するに、南朝の建康では正殿前の左右対称の鐘の設計が大きく変化した。王朝の正当性を主張するために、劉宋王朝は、太極殿の殿庭における左右対称の「鐘虞」を再現しようとしたが、戦乱のために、劉宋の「鐘虞」は、本来の西晋の「鐘虞」のセットをそのまま再現できなかった。西晋の六鐘の設計は、遅くとも梁代に入ると、左右対称の二つの鐘の設計へと変更された。一方、南齊の「永明九年策秀才文五首」や梁武帝の大同2年詔から窺えるように、その不完全な「鐘虞」に対して、「肺石」と同様、人の意見を聞くため、いわゆる「招諫」の機能が強調されるようになった。

これまでの分析をまとめると、南朝の南齊・梁代の建康では、正殿の殿庭に二つの鐘楼が建設され、さらに楽器という本来の機能に人の意見を聞く機能も加えられた。梁代は、函の制度を謗木と肺石とともに導入した時代でもあった。

このように他の王朝に比べて、梁は謗木・肺石・函、諫鼓、鐘など最も多様な器具を併用した。これは訴訟の手順から考えると、梁代における三審制の成立を意味するものと思われる。一般的な論理で考えると、都に「招諫」の器具が一重にしか設けられない場合、訴人はさらに上告することができない。またすべての訴訟がすぐ皇帝という最上審に上がると、システム全体をパンクの状態に追い込む危険性がある。たとえば、唐代の事例だが、唐高祖は政治を革新するために当初自ら東西朝堂で訴状を受け入れることにした。ところが、上訴の文書が一日数百にも及ぶ事態が発生した。手に負えなかった唐高祖は、数日後東西朝堂に出御するのを諦めてしまった⁽⁵⁶⁾。このような事例を参考に梁代の多様な「招諫」の器具の使い分けを考えると、もし地方に

よる審理を第一審だとすれば、公車府における「諫鼓」・「謗木」・「匱」は第二審に当たる。それ以外に鐘や鼓が加えられたのは、公車府と別の上級審（第三審）が設けられたことを意味するだろう。実際に臧厥伝や吉玢伝をみると、「登聞鼓」による上訴の審理に皇帝が直接関わったことがわかる。

推測に推測を重ねる部分もあるが、もし上記の分析が正しければ、梁代に三審制はすでに成立しており、その後隋代の制度と孝徳朝の三審制に繋がると想定できる。

隋代（589～618）

陳を平定した後、権力の正当性や唯一性を主張するために、隋は建康の都城及び南朝の文物を悉く破壊した。建康の太極殿の殿庭における鐘も例外ではない。たとえば、「無謝」鐘は、建康から隋の西京（長安）に移転され、当初雅楽を掌る太常寺で一時保管されたが、開皇 15（595）年に入ると、破壊されることになった⁽⁵⁷⁾。

隋代に、正殿の殿庭における左右対称の鐘のかわりに、左右対称の鐘楼・鼓楼の設計が導入された。唐代成立の『大業雜記』をみると、洛陽の乾陽殿庭の東南と西南に二つの「重楼」があり、一つは鐘を懸け、一つは鼓を懸けたとある。楼の下に「刻漏」という水時計が設置された。定刻になると、鐘・鼓が撃たれるという⁽⁵⁸⁾。この設計は、「また候景分箭上水方器（水時計の器具：ファム）を作り、東都の乾陽殿前の鼓下の司辰（時間を掌る役人：ファム）を置く」という『隋書』の記載からも確認できる⁽⁵⁹⁾。

このように、それまでの王朝に比べて、隋は正殿前の空間の設計を大きく変更した。漢代から始まって、南北朝を通じて利用された左右対称の鐘の設置のかわりに左右対称の鐘楼・鼓楼の設計が創出された。東晋・南北朝には水時計やそれに伴う太鼓が端門に設けられたようだ（渡辺 2009）⁽⁶⁰⁾が、隋代になると、水時計は鼓楼や鐘楼の一階に設置され、それと同時に鐘の機能も時間を知らせることに変わった。隋に始まったこの設計は後に唐や北宋に継承された。

隋代に用いられた招諫器具は「登聞鼓」である。

開皇律令を制定した隋文帝は詔で次のように訴訟手順を規定した。訴人はまず県で上訴し、そこでもし不満がまだあるならば、郡や州に上訴する。中央では尚書省による審理があり、そこでも不満を持つ人は次に闕に詣で、申し出ることができる。有司がきちんと審理をしてくれなければ、登聞鼓を撃つことが許される⁽⁶¹⁾。

唐代（618～907）

正殿の殿庭における設計に関して、唐は隋の鐘楼・鼓楼の設計及びその時間を知らせる機能をそのまま継承した。長安では太極宮（西内）、大明宮（東内）、興慶宮（南内）という「三内」があるが、いずれにおいても左右対称の鐘楼・鼓楼の設計を導入した。『長安志』によると、太極宮の正殿・太極殿の東南に鼓楼があり、西南に鐘楼があるという⁽⁶²⁾。その鐘の銘文は唐代の『初学記』に書き残されているが、「貞観 14（640）年、歳が「庚」に宿り（「歳在上章」）、職人に鐘を鑄造させ、諸々の路寝の庭に陳列し、以って壺人の節を紀す」との文言に注目すべきである⁽⁶³⁾。「壺人」は水時計の担当者なので、鐘の機能が時間を知らせることにあるとわかる⁽⁶⁴⁾。「路寝」は正殿の別称である。「諸路寝之庭」とあるように、時間を知らせる鐘は太極殿だけでなく、各正殿の殿庭に設置された。実際に大明宮の含元殿⁽⁶⁵⁾、興慶宮の大同殿⁽⁶⁶⁾の殿庭にこのような鐘楼が建設されたことは、多くの史料で確認できる。

唐代には招諫器具として登聞鼓、肺石⁽⁶⁷⁾、匱が利用された。

まず登聞鼓に関しては、武徳年間、唐高祖は「又令西朝堂納冤抑、東朝堂納直諫」とあるように、西朝堂を「冤抑」を納める場として、東朝堂を「直諫」を納める場として位置づけ⁽⁶⁸⁾、その詔書で初めて「諫鼓」の理念に触れた。ところが、登聞鼓・肺石が実際に導入されたのは 660 年以降であった。北宋代の『文昌雜録』や『玉海』所引の『唐会要』の逸文によると、顕慶 5（660）年、ある人が鼓を朝堂に携行して上訴したことをきっかけに、唐高宗は西朝堂に「登聞鼓」を、東朝堂に「肺石」を設置

することにしたという⁽⁶⁹⁾。この逸文が正しければ、唐朝は当初（618～660）、隋の登聞鼓の制を継承しなかったが、660年に登聞鼓を復活することを決めたのである。

登聞鼓の設置場所に関しては、古典的招諫思想では「朝」に懸けるとする管子説と、「門」に懸けるとする鬻子・『周礼』説の両方があるが、唐代の宮室制度では闕の外に朝堂の空間を設けることによって、その問題を解消する工夫がなされたことに注目すべきである。たとえば、長安の太極宮の場合は、韋述（？～757）撰『西京新記』によると、登聞鼓・肺石は則天門（闕）の外にある朝堂の空間における左右対称の「観」に設けられたという⁽⁷⁰⁾。洛陽の紫微宮の場合も、登聞鼓・肺石は応天門（闕）の外にある朝堂の空間における「観」に設置された⁽⁷¹⁾。大明宮でも同様のことが確認できるが、正殿・含元殿を闕にもした大明宮では、登聞鼓が「正殿の前」＝「闕」＝「朝」に懸けられる結果となった⁽⁷²⁾。

則天武后は洛陽で登聞鼓・肺石とともに「匱」の制度も導入した。垂拱2（685）年、則天武后は「太后命鑄銅為匱、置之朝堂、以受天下表疏銘」とあるように、天下の表疏を受け入れるために朝堂に銅匱を設置した。東西南北の方角にあわせる色を施した銅匱は、それぞれ「延恩」・「伸冤」・「通玄」・「招諫」と命名され、投書する内容も細かく区別された⁽⁷³⁾。これらの銅匱は天宝9（750）年に「匱」から「献納」に改称され、さらに乾元元（758）年に「匱」に復名された⁽⁷⁴⁾。

要するに、唐朝は隋と同様、正殿の殿庭における左右対称の鐘楼・鼓楼の設計を採用した。ところが、鐘楼の機能は招諫ではなく、時間を知らせるためのものである。唐代の招諫器具は、諫鼓、肺石及び匱である。そして、「朝（堂）」を闕の外に設けることにより、鼓の設置場所をめぐる鬻子・『周礼』と管子との見解の相違を解消したのである（図5）。

3. 中国の招諫思想からみる前期難波宮の「鐘匱の制」および平城宮の「二柱の制」

前章で分析した結果をもとに、前期難波宮の

「鐘匱の制」と平城宮の「二柱の制」を再検討したい。

まず前者に関しては、冒頭で説明したように岸俊男氏は、「唐の肺石・登聞鼓の制を継受したものとみて誤りあるまい」と主張した。岸氏は『資治通鑑』武徳2（619）年4月条及び『新唐書』貞観2（618）年8月甲戌条を根拠に唐の肺石・登聞鼓は、前期難波宮の成立以前に唐高祖の世に長安城に設置されたと考えていた（岸 1977）。ところが、『資治通鑑』の記事をよくみると「又令西朝堂納冤抑、東朝堂納直諫」とあるように、東西朝堂をそれぞれ「冤抑」や「直諫」を納める場として設置したとしか書かれておらず、登聞鼓や肺石に全く言及されない⁽⁷⁵⁾。『新唐書』の記事にも登聞鼓や肺石が触れられなかった⁽⁷⁶⁾。

前章で『文昌雜録』や『玉海』所引『唐会要』の逸文を検討したように長安で登聞鼓が実際に設置されたのは顕慶5（660）年以降である。それに対して、孝徳天皇が前期難波宮に「鐘匱の制」を導入したのは645～646年である。また器具からみても、鐘・匱を採用した孝徳朝の制度と登聞鼓・肺石を採用した唐の制度は、明らかに次元を異にしているのである。このように考えると、前期難波宮の「鐘匱の制」は唐の登聞鼓・肺石の制を継受したという岸氏の仮説は成立しがたいと言わざるをえない。

それでは、前期難波宮の「鐘匱の制」の原型はどこにあっただろう。中国の歴代王朝による招諫思想の具現化をみると、一般的に利用された器具は登聞鼓、肺石、謗木である。鐘は確かに先秦の思想家たちによって取り上げられたのだが、しばらく具現化されなかった。南朝は、戦乱のために、漢代以来利用された楽器としての鐘虡をフルセットで建康に移転することに失敗したため、梁代以降正殿の広場にある鐘を招諫器具として位置づけることにした。一方、匱の制は梁代にも唐代にも利用されたものの、前章で指摘したように唐の匱制が初めて導入されたのは則天武后の垂拱元（684）年以降であった。つまり、640年代に成立した前期難波宮における匱の制は、唐の匱制から影響をうけたとは考えられないのである。

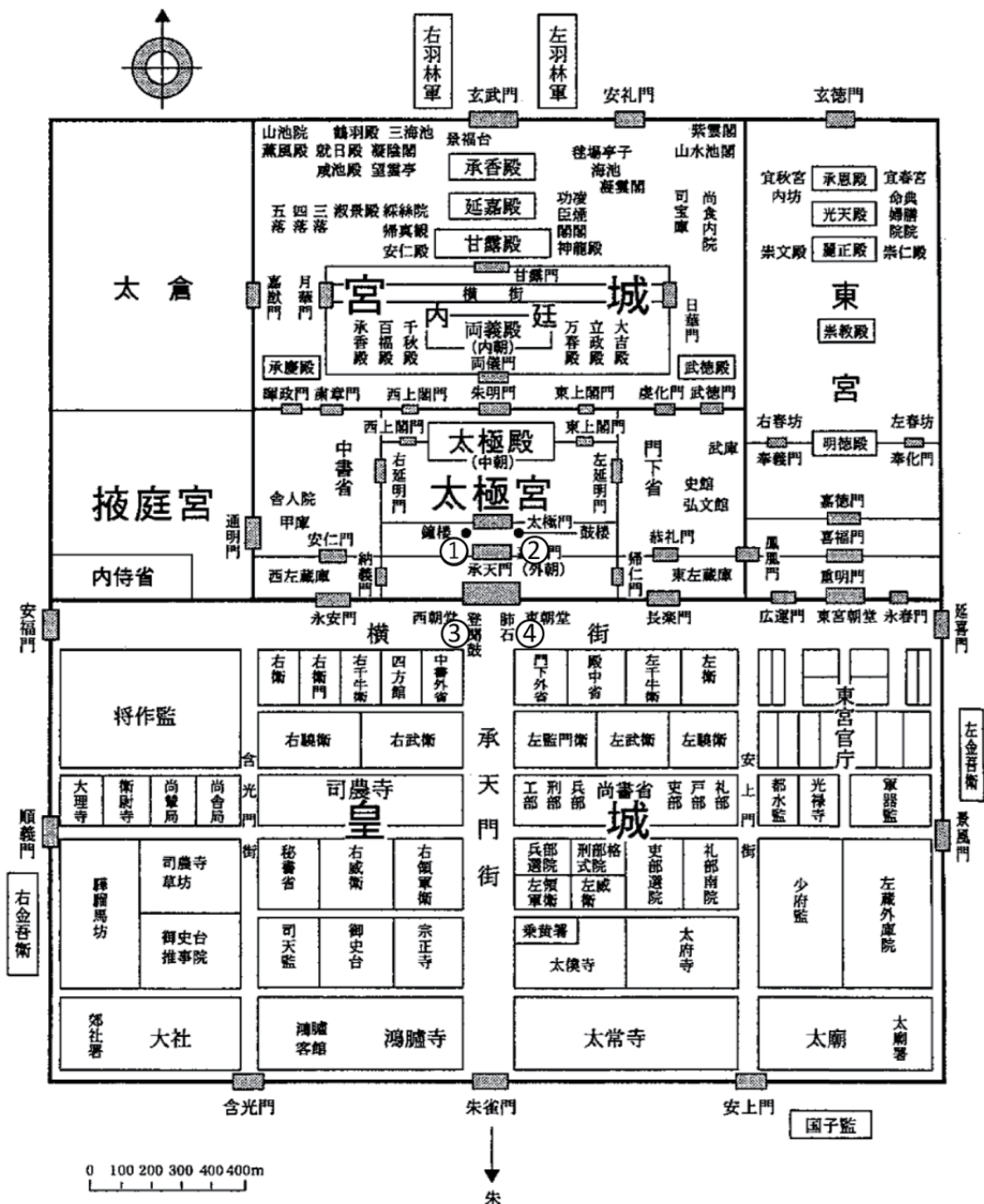


図5 唐代の鐘樓・鼓樓と登聞鼓・肺石（渡辺 [2009] より転載）

以上、鐘と匱を併用したことからみて、前期難波宮の「鐘匱の制」は唐ではなく、南朝梁の建康における制度を直接継受したと考えるべきである。

次に平城宮の「二柱の制」に目を向けると、前述したように金子裕之氏はその設置は唐の肺石・登聞鼓の制を受容したと主張した。ただ中壬生門にあたる平城宮の第二次朝堂・朝集殿院の南門SB18400では、承天門のような闕に類する施設が

ないと氏は疑問を付した。

ところが、器具の種類からみると、平城宮の「二柱の制」は明らかに肺石・登聞鼓ではなく、唐代以前の謗木の系譜を引いたものである。前述したように、古典的招諫思想では、招諫器具を「朝」に置くとする説と「門」＝「闕」に置くとする説の両方あるが、平城宮の「二柱の制」は「朝」に置くとする説の系譜を引いた制度であることがわかる。

結論

中国の招諫思想は先秦時代の思想家によって提唱され、中国の歴代王朝によって都城制の一部として具現化された。招諫思想は7世紀に日本の古代国家にも受容されはじめ、飛鳥板蓋宮及び前期難波宮の「鐘匱の制」として整備された。従来招諫思想に関する研究は皆無であったため、孝徳朝の「鐘匱の制」は唐の登聞鼓・肺石の制を継受したと考えられてきた。ところが、本稿で論じたようにその源流は唐の制度ではなく、南朝梁の制度に求めるべきである。前期難波宮の「東西長殿」の設計に合わせて考えると、7世紀に整備された日本の宮都制においては隋唐の制度のみならず、南朝の文化や制度も考慮されたことがわかる。その背景には5世紀以降の日本と南朝との交流がある一方、朝鮮半島を通じて南朝文化や制度を導入した可能性も想定できるだろう。

8世紀の半ばに入って、中国の招諫思想は再び「二柱の制」の形で平城宮に具現化された。その発案者は、長年唐で留学経験を積み重ねた吉備真備であるが、採用された器具は、当時唐で利用されている登聞鼓や肺石ではなく、古典的な招諫思想で提唱された謗木のほうである。

日本の宮都制と都城制は招諫思想や『周礼』などの中国の古典とともに、南朝の都城制や隋唐の都城制を多様に導入したものと考えられる。

付記

本研究は、2014年における住友財団からの研究助成によって行われたものである。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。なお、本稿は2018年の新潟大学、2019年の北京大学での口頭発表を踏まえた上で文章化したものである。

注

- (1) 「正殿・東西堂」型とは、正殿の左右に「東堂」「西堂」を設置する正殿空間の設計である。この設計は曹魏の青龍3（235）年に誕生し、南北朝まで利用された（劉 1934、岸 1977、吉田 2002）。
- (2) 「是日、設鐘匱於朝而詔曰、若憂訴之人、有伴造者、其伴造先勘当而奏、有尊長者、其尊長先勘当

而奏、若其伴造・尊長、不審所訴、收牒納匱、以其罪々之、其收牒者、昧旦執牒、奏於内裏、朕題年月、便示群卿、或懈怠不理、或阿党有曲、訴者可以撞鐘、由是、懸鐘置匱於朝、天下之民、咸知朕意」（『書紀』卷 25、大化元（645）年8月庚子（5日）条）。

- (3) 「二月甲午朔戊申、天皇幸宮東門、使蘇我右大臣詔曰、明神御宇日本倭根子天皇詔於集侍卿等、臣連、国造、伴造及諸百姓、朕聞、明哲之御民者、懸鐘於門（闕）、而觀百姓之憂、作屋於衢、而聽路行之謗、雖芻蕘之說、親問為師、由是、朕前下詔曰、古之治天下、朝有進善之旌、誹謗之木、所以通治道、而來諫者也、皆所以広詢于下也、管子曰、黃帝立明堂之議者、上觀於賢也、堯有衢室之問者、下聽於民也、舜有告善之旌、而主不蔽也、禹立建鼓於朝、而備訊望也、湯有總術之庭、以觀民非也、武王有靈台之囿、而賢者進也、此故聖帝明王、所以有而勿失、得而勿亡也、所以、懸鐘設匱、拜收表人、使憂諫人、納表于匱、詔收表人、每旦奏請、朕得奏請、仍又示群卿、便使勘当、庶無留滞、如群卿等或懈怠不勸、或阿党比周、朕復不肯聽諫、憂訴之人、当可撞鐘、詔已如此。既而有民明直心、懷国土之風、切諫陳疏、納於設置、故今顯示集在黎民、其表称、縁奉国政、到於京民、官留使於雜役云々、朕猶以之傷惻、民豈復思至此、然遷都未久、還似于賓、由是、不得不使、而強役之、每念於斯、未曾安寝、朕觀此表、嘉歎難休、故隨所諫之言、罷処々之雜役、昔詔曰、諫者題名、而不隨詔、今者、自非求利、而將助国、不言題不、諫朕廢忘」（『書紀』卷 25、大化2（646）年2月戊申（15日）条）。

- (4) 「若其伴造尊長、不審所訴、收牒納匱」との文言に関して、日本古典文学大系本『日本書紀』の注釈では「伴造・尊長はその訴えを牒に記し記名して匱に投ずる」とあるように、匱に投書する主体は「伴造・尊長」だと解釈された。ところが、大化2年の詔書の「使憂諫人、納表于匱」との文言や後述の中国の制度を参考にすると、匱に牒を投書する主体は「憂訴之人」「憂諫人」だと考えるべきであろう。

- (5) 工人大山位倭漢直荒田井比羅夫、誤穿溝流控引難波、而改穿疲勞百姓、爰有上疏切諫者、天皇詔曰、妄聽比羅夫所詐、而空穿流、朕之過也、即日罷役」(『書紀』卷 25、大化 3〈647〉年是歲条)。
- (6) 子代離宮は、現在の大阪城西の丸付近だと考えられているが、痕跡はまだ確認されていない(吉川 1997)。
- (7) 「冬十二月、乙未朔癸卯、天皇遷都難波長柄豐碕、老人等相謂之曰、自春至夏、鼠向難波、遷都之兆也」(『書紀』卷 25、大化元〈645〉年 12 月癸卯〈9 日〉条)。
- (8) 「冬十二月晦(中略)於是、天皇徙於大郡遷居新宮、号曰難波長柄豐碕宮」(『書紀』卷 25、白雉 2〈651〉年 12 月晦条)。
- (9) 「鐘匱の制」に着目した岸俊男氏も「難波宮当時こうした制度があったと考えねばならない」と指摘した(岸 1977)。
- (10) 「戊午、大納言正三位吉備朝臣真備奏、樹二柱於中壬生門西。其一題曰、凡被官司抑屈者、宜至此下申訴、其一曰、百姓有冤枉者、宜至此下申訴、並令彈正台受其訴狀」(『続日本紀』卷 27、天平神護 2〈766〉年 5 月戊午〈4 日〉条)。
- (11) 「禹之治天下也、以五声聽、門懸鐘鼓鐸磬、而置鞀、以待四海之士、為銘於筍簴曰、教寡人以道者擊鼓、教寡人以義者擊鐘、教寡人以事者振鐸、告寡人以憂者擊磬、語寡人以訟獄者揮鞀、此之謂五声」(『鬻子』禹政)。
- (12) 「昔黃帝立明堂之議、堯有衢室之問、舜有告善之旌、禹有立鼓之訊、湯有綵街之誹、武王有靈台之復、皆所以広設、過誤之備也」(『管子』卷 18)。
- (13) 「黃帝立明堂之議者、上觀於賢也、堯有衢室之問者、下聽於人也、舜有告善之旌而主不蔽也、禹立諫鼓於朝而備訊唉、湯有綵街之庭、以觀人誹也、武王有靈台之復、而賢者進也、此古聖帝明王、所以有而勿失、得而勿忘者也」(『管子』卷 18)。
- (14) 「按尸子云、堯立誹謗之木」(『史記』卷 10、孝文本紀第 10)。
- (15) 「建路鼓于大寢之門外、而掌其政」(『周礼』夏官司馬下)。「以嘉石平罷民(文石也、樹之外朝門左)、肺石達窮民(赤石也)」。「立於肺石三日、士聽其辭、以告於上」(『周礼』秋官・大司寇)。
- (16) 「侍御史何敞上疏理之曰、臣聞聖王關四門、開四聰、延直言之路、下不諱之詔、立敢諫之旗、聽歌謠於路、(歌謠謂詩也、禹置敢諫之幡)」(『後漢書』卷 29、邳彤傳)。
- (17) 「昔帝軒刻輿几以弼違、大禹勒筍簴而招諫」(『文心雕龍』卷 3、銘箴第 11)。
- (18) 法制史の視点で「匱」の制度に注目した研究として楊・劉(1980)、「登聞鼓」に関する研究として張(2009)や秦(2011)、越訴や直訴に関する研究として陳(2007)などがある。
- (19) 「其宮室也、(中略)門闔洞開、列鐘虞於中庭」(『後漢書』卷 40 上、兩都賦)。
- (20) 「舉說朱伥曰、朝廷在西鐘下時、非孫程等豈立」(『後漢書』卷 61、周舉傳)。
- (21) 「迎濟陰王於德陽殿西鐘下」(『後漢書』卷 6、順帝、延光 4〈125〉年 11 月丁巳条)。
- (22) 「然後撞鐘、告罷百寮遂退(撞猶擊也、尚書大傳曰、天子將入、則撞蕤賓之鐘、左五鐘皆応之)」(『後漢書』卷 40 下、班固下、兩都賦)。
- (23) 「震復上疏救之曰、臣聞、堯舜之世、諫鼓謗木、立之於朝、(中略)帝不省、騰竟伏尸都市」(『後漢書』卷 54、楊震傳)。
- (24) 「誹謗之木、集解、服虔曰、堯作之、橋梁交午柱頭、応劭曰、橋梁辺板所以書政治之愆失也、至秦去之、今乃復施也、索隱、按尸子云、堯立誹謗之木(誹音非、亦音沸、)韋昭曰、慮政有欠失、使書於木、此堯時然也(中略)是鄭玄注、礼云、一縱一横為午、謂以木貫表柱四出、即今之華表、崔浩、以為木貫柱四出名桓、陳楚俗桓声近和、又云和表、則華与和又相訛也」(『史記』卷 10、孝文本紀第 10)。
- (25) ただ「鐘樓」という建物の中に配置されたかどうかは、不詳である。史料には「鐘虞」という掛け台に懸けられる二つ(以上)の鐘の設計としか書かれていない。この問題に関して、漢代に文昌殿の前に鼓楼と鐘楼があったという仮説がある(劉 1986、辛 2011)が、その説の根拠とされた史料は、明代の嘉静年間の『彰徳府志』の「鐘樓、鼓楼、

- 在文昌殿前東西」との記述である。ところが、『彰徳府志』が記した東の「鐘樓」が『後漢書』の「西鐘」と矛盾していること、『後漢書』に左右の鐘が存在したとあること、また後述するように晋代にも鐘が左右（東西）とも設けられたことをあわせてみると、この仮説を支持することはできない。
- (26) 当時、端門にも鐘があったが、これは大朝の儀に利用された楽器である。「端門有大鐘、上作群獅交紐、凡正朝大会擊之、与鼓吹相应、聞二十里」（『華氏洛陽記』端門鐘）。
- (27) 「五月、天子命帝冕十有二旒、建天子旌旗、出警入蹕、乘金根車、駕六馬、備五時副車、置旄頭雲罕、樂舞八佾、設鐘虡宮懸」（『晋書』卷2、太祖文帝、咸熙2〈265〉年5月条）。「戴延之西征記曰、洛陽太極殿前、左右各三銅鐘相對、鐘大者三十二圍、小者二十五圍」（『太平御覽』卷575、鐘）。
- (28) 「惠帝元康三年閏二月、殿前六鐘皆出涕、五刻止」（『晋書』卷27、五行上、金）。
- (29) 「六月（中略）西平人麴路伐登聞鼓、言多祿謗、有司奏棄市」（『晋書』卷3、世祖武帝、泰始5〈269〉年6月条）。
- (30) 「於是繇等執黃旛、搗登聞鼓、上言曰（後略）」（『晋書』卷36、衛瓘伝）。
- (31) 「及敦死、札、蒞故吏並詣闕、訟周氏之冤、宜加贈諡」（『晋書』卷48、周札伝）。
- (32) 「崔豹古今注答程雅問、堯謗木曰今之華表、木形似桔槔、大路高衢悉施焉、秦乃除之、漢始復脩、今西京謂之交午木」（『玉海』卷90、堯謗木・諫鼓）。
- (33) 「咸康二年、使牙門將張弥徙洛陽鐘虡、九龍、翁仲、銅駝、飛廉于鄴、鐘一没于河、募浮没三百人入河、繫以竹絙、牛百頭、鹿盧引之乃出、造万斛舟以渡之、以四輪纏輶車、轍広四尺、深二尺、運至鄴」（『晋書』卷106、石季龍上）。
- (34) 「初、桓温平洛陽、議欲遷都（中略）、又議欲移洛陽鐘虡」（『晋書』卷75、王湛伝）。
- (35) 「六月（中略）戊戌、封皇子晞為武陵王、初置諫鼓謗木」（『晋書』卷6、元帝、太興元〈318〉年6月戊戌条）。
- (36) 「朝廷以違科、免蘊官、士庶詣闕訟之」（『晋書』卷93、王蘊伝）。
- (37) 「七年春正月乙酉朔（中略）戊戌、作神龍・仁虎闕於端門、大司馬門外」（『梁書』卷2、武帝、天監7〈508〉年正月戊戌条）。
- (38) 「魏主詔、闕左懸登聞鼓、以達冤人」（『資治通鑑』卷122、宋紀4、元嘉9〈432〉年条）。
- (39) 「諸州国之大辟、皆先讞報乃施行、闕左懸登聞鼓、人有窮冤則搗鼓、公車上奏其表、是後民官瀆貨、帝思有以肅之」（『魏書』卷111、刑罰）。
- (40) 「穎容又曰、闕者、上有所失、下得書之於闕、所以求論譽於人、故謂之闕矣、今闕前水南道右、置登聞鼓以納諫」（『水經注』卷16、穀水）。
- (41) 「冬十月、於陽武門外懸鼓、置紙筆、以求得失」（『北史』卷5、西魏文帝、大統5〈532〉年10月条）。
- (42) 「伏願陛下、式遵遠猷、思隆高構、推忠恕之愛、矜冤枉之獄、遊心下民之瘼、厝思幽冥之紀、令謗木豎闕、諫鼓鳴朝、察芻牧之言、總統御之要（中略）」（『宋書』卷60、范泰伝）。
- (43) 「中興元年、詣公車尚書申冤、言多指斥、尋下獄死」（『南史』卷45、崔慧景伝）。
- (44) 「朕立諫鼓、設謗木、於茲三年矣」（『文選注』卷36、天監三年策秀才文三首）。
- (45) 「厥卒後、有搗登聞鼓訴者、求付清直舍人、高祖曰、臧厥既亡、此事便無可付、其見知如此」（『梁書』卷42、臧厥伝）。「玢乃搗登聞鼓、乞代父命」（『梁書』卷47、吉玢伝）。
- (46) 「景昞公車府（公車府、蕭子顯齊志、公車令、屬領軍、以受天下章奏、梁制、公車令、屬衛尉、其署舍在台城門外、故景得昞之府者、署舍之通稱）」（『資治通鑑』卷161、梁紀17、太清2〈548〉年条）。
- (47) 「九月（中略）辛亥、大赦天下、又詔曰、舉善從諫、在上之明規、進賢諷言、為臣之令範、朕以寡德、嗣守寶圖、雖世襲隆平、治非寧一、弁方分職、盱食早衣、傍闕爭臣、下無貢士、何其闕爾、鮮能抗直、豈余獨運、匪薦讜言、置鼓公車、罕論得失、施石象魏、莫陳可否」（『陳書』卷5、宣帝、太

建4（572）年9月辛亥条）。

- (48) 「癸酉、詔曰、商俗甫移、遺風尚熾、下不上達、由來遠矣、升中馭索、增其懷然、可於公車府謗木肺石傍、各置一函、若肉食莫言、山阿欲有橫議、投謗木函、若從我江漢、功在可策、犀兕徒弊、龍蛇方懸、次身才高妙、擯壓莫通、懷傳、呂之術、抱屈、賈之歎、其理有皦然、受困包匭、夫大政侵小、豪門陵賤、四民已窮、九重莫達、若欲自申、並可投肺石函」（『梁書』卷2、武帝、天監元（502）年4月癸酉条）。
- (49) 「鐘律緯云、宋武所取長安六鐘、其三在洛、到彥之入河、先定伊闕、宋文帝詔使取此鐘、七年之季、旋覆京師、三鐘翳沒、竟不果致」（『玉海』卷109所引『鐘律緯』）。
- (50) 「宮苑記又云、太極殿前、東西有三大鐘、宋武帝平洛所獲、並漢魏旧器」（『景定建康志』卷21、城闕志2、古宮殿）。
- (51) 「山謙之記云、殿前三鐘、悉是周景王所鑄無射也、遣樂官以今無射新笛飲、不相中、以夷則笛飲、則声韻合和、端門外鐘、亦案其銘題、定皆夷則、（中略）宋武平中原、使將軍陳傾致三鐘、小大中各一、則今之太極殿前二鐘、端門外一鐘是也、案西鐘銘則云、清廟撞鐘、秦無清廟、此周制明矣、又一銘云、太簇鐘徵、則林鐘宮所施也。京房推用、似有由也。檢題既無秦漢年代、直云夷則、太簇、則非秦、漢明矣」（『隋書』卷16、律曆上、和声）。
- (52) 「或揚旌求士、或設虞待賢（求士待賢、皆謂請其言也、管子曰、舜有告善之旌、心効漢書注曰、旌幡也、設之五達之道、鬻子曰、昔大禹治天下也、以五声聽治、為銘於荀虞曰、教寡人以道者擊鼓、教寡人以義者擊鐘、教寡人以事者振鐸、語寡人以憂者擊磬、語寡人以獄者揮鞀也）」（李善『文選注』卷36、永明9年策秀才文五首）。
- (53) 「三月庚申、詔曰、政在養民、德存被物、上令如風、民応如草、朕以寡德、運属時来、撥乱反正、倏焉三紀、不能使重門不閉、守在海外、疆場多阻、車書未一、民疲輻輳、士勞边防、徹田為粮、未得頓止、治道不明、政用多僻、百辟無沃心之言、四聰闕飛耳之聴、州輟刺举、郡忘共治、致使失理負

謗、無由聞達、侮文弄法、因事生姦、肺石空陳、懸鐘徒設、書不云乎、股肱惟人、良臣惟聖、寔頼賢佐、匡其不及、凡厥在朝、各獻讜言、政治不便於民者、可悉陳之、若在四遠、刺史二千石長吏、並以奏聞、細民有言事者、咸為申達、朕將親覽、以紓其過、文武在位、举爾所知、公侯將相、隨才擢用、拾遺補闕、勿有所隱」（『梁書』卷2、武帝、天監元（502）年3月庚申条）。

- (54) 「梁正旦、使北使乘車至闕下、入端門、其門上層題曰朱明觀、次曰応門、門下有一大画鼓、次曰太陽門、左有高楼、懸一大鐘、門右有朝堂、門辟左右、亦有二大画鼓、北使入門、擊鐘磬、至馬道北懸鐘内、道西北立、引其宣城王等数人後入、擊磬、道東北面立、其鐘懸外東西廂、皆有陛臣」（『西陽雜俎』卷1、礼異）。
- (55) 渡辺信一郎氏は「懸鐘」を「オーケストラ」と訳した（渡辺 2009）。「懸鐘」は「オーケストラ」の一部として利用されたのだが、上記に分析したように太極殿前の鐘のことを指すと考えるべきであろう。梁武帝の大同2年にも「懸鐘」の用語がみられる。また孝徳天皇の大化元年及び2年詔書にも「懸鐘」の用語が確認できる。
- (56) 「又令西朝堂納冤抑、東朝堂納直諫、於是獻策上書者、且有数百、条流既煩、省覽難遍、数日後不復更出」（『資治通鑑』卷187、武徳2（619）年4月戊申条）。
- (57) 「秦滅周、其鐘徙於長安、歷漢魏晉、常在長安、及劉裕滅姚泓、又移於江東、歷宋齊梁陳時、鐘猶在、（中略）及開皇九年、平陳又遷於西京、置大常寺、時人悉共見之、至十五年勅毀之」（『重刊宋本十三經注疏附校勘記』昭公）。上記の開皇15年の出来事は、『隋書』に見えないが、北宋代になると『能改齋漫録』で『十三經注疏』の開皇15年の出来事は、隋が陳の古器を破毀したという『隋書』の記載に当たると指摘された。「隋志不言其詳、惟高祖紀云、十一年春正月丁酉、以平陳所得古器、多為妖変、悉命毀之」（『能改齋漫録』卷7、無射大鐘）。
- (58) 「殿庭左右各有大井、井面濶二十尺、庭東南西南各有重樓、一懸鐘、一懸鼓、刻漏即在楼下、随刻

漏則鳴鐘鼓」（『說郛』卷 110 上所引『大業雜記』）。

- (59) 「又作候景分箭上水方器、置於東都乾陽殿前鼓下司辰」（『隋書』卷 19、天文上、漏刻）。
- (60) 「上數遊幸諸苑囿、載宮人從後車、宮內深隱、不聞端門鼓漏聲、置鐘於景陽樓上、宮人聞鐘聲、早起裝飾、至今、此鐘唯應五鼓及三鼓也」（『南齊書』卷 20、武穆裴皇后傳）。「二月己巳、會稽太守王舒表獻銅漏刻、詔置端門西塾之西」（『建康實錄』卷 7）。
- (61) 「帝又以律令初行、人未知禁、故犯法者衆、又下吏承苛政之後、務鍛鍊以致人罪、乃詔申勅四方、敦理辭訟、有枉屈不報者、令以次經郡及州、至省仍不理、乃詣闕申訴、有所未愜、聽搗登聞鼓、有司錄狀奏之」（『隋書』卷 25、刑法）。
- (62) 「承天門內、北曰太極門（隋曰大興門、後改曰干福門、貞觀八年、改為太極門、殿東隅有鼓樓、西隅有鐘樓、貞觀四年置）、其內正殿曰太極殿」（『長安志』卷 6、宮室 4）。
- (63) 「粵以貞觀之十四載、歲在上章、乃詔工者臯氏鑄銅為鐘、陳諸路寢之庭、以紀壺人之節」（『初學記』卷 16、樂部下）。
- (64) 水時計の設置場所は「刻漏所」と呼ばれた。「太極殿前刻漏所、亦以左契給之、右以授承天門監門」（『新唐書』卷 24、車服）。
- (65) 「殿東南有翔鸞閣、西南有栖鳳閣、與殿飛廊相接、又有鐘樓鼓樓」（『長安志』卷 6、宮室 4）。
- (66) 「天寶十載六月乙亥、大同殿前鐘自鳴」（『新唐書』卷 35、五行 2、金）。
- (67) 『夢溪筆談』によると、唐代長安の「肺石」は宋代にまだ残っており、長さ八・九尺で肺の形を呈した。「長安故宮闕前、有唐肺石、尚在長八九尺、形如垂肺、肺主声声、所以達其冤」（『夢溪筆談』卷 19）。
- (68) 「又令西朝堂納冤抑、東朝堂納直諫、於是獻策上書者、日有數百、條流既煩」（『資治通鑑』卷 187、武德 2〈619〉年 4 月戊申條）。
- (69) 「代因說唐會要、見顯慶五年、有抱屈人、齎鼓於朝堂訴、遂令東西都各置登聞鼓」（『文昌雜錄』卷 5）。「唐會要、顯慶五年八月、有人齎鼓於朝

堂訴、上令東都置登聞鼓嘉石、西京亦然」（『玉海』卷 110、晉登聞鼓・唐登聞鼓）。『玉海』では「嘉石」とされているが、「肺石」の誤記であろう。

- (70) 「韋述西京新記曰、西京、俗曰長安城、亦曰京城（中略）皇城南面六門、正南承天門、門外兩觀、肺石、登聞鼓」（『太平御覽』卷 183、居處部 11、門下）。
- (71) 「又曰、東京紫微宮、城南面六門、正南應天門、門外觀相夾肺石、登聞鼓」（『太平御覽』卷 183）。
- (72) 「龍朔二年、造蓬萊宮含元殿、又造宣政紫宸蓬萊三殿、殿東南有翔鸞閣、西南有棲鳳閣、與殿飛廊相接、又有鐘樓鼓樓、（中略）、東有通乾門、西有觀象門、閣下即朝堂、肺石登聞鼓、一如承天之制」（『長安志』卷 6）。
- (73) 「三月戊申、太后命鑄銅為匭、置之朝堂、以受天下表疏銘、其東曰延恩、獻賦頌、求仕進者投之、南曰招諫、言朝政得失者投之、西曰伸冤、有冤抑者投之、北曰通玄、言天象災變、及軍機秘計者投之（四匭各依其方色）」（『資治通鑑』卷 203、垂拱元（684）年 3 月戊申條）。「三月、初置匭於朝堂、有進書言事者聽投之、由是人間善惡事、多所知悉」（『旧唐書』卷 6、則天皇后武曌、垂拱 2〈685〉年 3 月條）。
- (74) 「知匭使、天后垂拱元年、置匭以達冤滯、其制、一房四面、各以方色、東曰延恩、西曰申冤、南曰招諫、北曰通玄、所以申天下之冤滯、達万人之情狀、蓋古善旌、誹謗木之意也、天寶九年、改匭為獻納、乾元元年、復名曰匭、垂拱已來、常以諫議大夫及補闕、拾遺一人充使、受納訴狀、每日暮進內、而晨出之也」（『旧唐書』卷 43、中書省、知匭使）。
- (75) 「又令西朝堂納冤抑、東朝堂納直諫、於是獻策上書者、日有數百、條流既煩」（『資治通鑑』卷 187、武德 2〈619〉年 4 月戊申條）。
- (76) 「八月甲戌、省冤獄于朝堂」（『新唐書』卷 2、太宗、貞觀 2〈628〉年 8 月甲戌條）。

参考文献

- 王仲殊 2004 「唐長安城および洛陽城と東アジアの都城」
『東アジアの都市形態と文明史』国際日本文化研究センター
- 金子裕之 2007 「長岡宮会昌門の樓閣遺構とその意義」
『古代都市とその形制』奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム報告集 Vol. 14
- 岸俊男 1977 「難波宮の系譜」『京都大学文学部研究紀要』
17 (岸俊男 1988 『日本古代宮都の研究』岩波書店、に
所収)
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 (校注) 1994
『日本書紀』下、岩波書店
- 佐竹昭 1988 「藤原宮の朝廷と赦宥儀礼」『日本歴史』
478 (佐竹昭 1988 『古代王権と恩赦』雄山閣、に所収)
- 秦双星 2011 「鼓声与民意——以登聞鼓制度為例的解讀」
『河北法学』第 29 卷第 11 期
- 辛德勇 2011 「淡唐代都邑の鐘樓与鼓樓——從一个物質文
化側面看佛、道兩教对中国古代社会的影響」『文史哲』
4
- 高橋崇 1983 「大化の鐘匱制について」『古代文化』第 35
卷第 12 号
- 張軍勝 2009 「登聞鼓源流略探」『青海民族学院学報』3
- 陳登武 2007 『從人間世到幽冥界——唐代的法制、社会与
国家』五南出版社
- 豊田裕章 2001 「前期難波宮と『周制』の三朝制について」
『ヒストリア』173
- 中尾芳治 1995 「前期難波宮と唐長安城の宮・皇城」『難
波宮の研究』吉川弘文館
- 中尾芳治 2014 「難波宮から藤原京へ——日本古代宮都の
成立過程をめぐって——」中尾芳治・栄原永遠男 (編)
『難波宮と都城制』吉川弘文館
- 村元健一 2010 「中国都城の変遷と難波宮への影響」積山
洋 (研究代表) 『東アジアにおける難波宮と古代難波
の国際的性格に関する総合研究』平成 18～21 年度科学
研究費補助金研究成果報告書
- 村元健一 2014 「中国宮城の変遷と難波宮」中尾芳治・栄
原永遠男 (編) 『難波宮と都城制』吉川弘文館
- 楊一凡・劉篤才 1980 「中国古代匱函制度考略」『法学研
究』1980 年 10 期
- 吉川真司 1997 「難波長柄豊碕宮の歴史的的位置」大山喬平
教授退官記念会 (編) 『日本国家の史的特質』古代・
中世、思文閣出版
- 吉田敏 2002 「魏晉南北朝時代の宮城中枢部」『日中宮城
の比較研究』吉川弘文館
- 劉敦楨 1934 「東西堂史料」『中国营造学彙刊』第 5 卷第
2 期
- 劉敦楨 (編) 2013 『中国古代建築史』中国建築工業出版
社 (初出は 1986 年)
- 渡辺信一郎 2009 「六朝隋唐期の太極殿とその構造」『都
城制研究 (2)』奈良女子大学 21 世紀 COE プログラ
ム報告集 Vol.23
- Phạm Lê Huy. 2012. *Ảnh hưởng của mô hình đô thành
Lạc Dương và Khai Phong đến qui hoạch hoàng thành
Thăng Long thời Lý – Trần*, Tạp chí Nghiên cứu và
Phát triển, số 8-9. (ファム・レ・フイ 2012 「李陳朝
期の昇龍京の都城計画と洛陽・開封の影響」『研究と
開発』8・9)
- Phạm Lê Huy. 2015. *Ý tưởng thiết kế Kinh đô Thăng
Long thời Lý và Cung Naniwa tiền kỳ của Nhật Bản –
Nhìn từ tư tưởng “Tam triều Ngũ môn chế” của Chu
Lễ*, Symposium “Urban Development in Vietnamese
History: An Interdisciplinary Perspective”,
ĐHKHXH&NV. (ファム・レ・フイ 2015 「『周礼』
の「三朝五門制」からみる李朝期の昇龍京及び前期難
波宮の設計構想」『シンポジウム 学際的な視点から
みるベトナム史における都市開発』人文社会科学大学)

キーワード

鐘匱の制、二柱の制、登聞鼓・肺石の制